第６０回　神戸市文化財保護審議会次第

日時　令和７年３月１１日（火）１４：００～
場所　神戸市役所１号館 14 階　AV1 会議室

１　開　　会

２　議　　事

（１）指定候補物件の調査報告

（２）登録候補物件の調査報告

（３）その他調査報告

（４）答申

（５）旧ハンター住宅の旧山口邸への移築と保存

（６）事務局からの報告

①　神戸歴史遺産　認定・助成

②　神戸市文化財保存活用地域計画

③　紙本著色平敦盛像の県指定格上げ

④　令和７年度予算案関連事項

⑤　その他

３　閉　　会

神戸市文化財保護審議会委員名簿

※委員任期　令和６年４月１日から令和７年７月１４日（任期２年）

	担当部門	氏　　名	役職等、（　）内は専門分野
1	建　　築	黒田　龍二	神戸大学名誉教授 （建築史）
2	建　　築	橋寺　知子	関西大学環境都市工学部准教授 （近代建築）
3	建　　築	大林　潤	奈良文化財研究所 建造物研究室 上席研究員（建築史）
4	建　　築	中江　研	神戸大学大学院工学研究科教授 （近代建築）
5	美術工芸品	筒井　忠仁	京都大学大学院文学研究科准教授 （絵画史）
6	美術工芸品	岩田　茂樹	東大寺上席研究員 （彫刻史）
7	民　　俗	大江　篤	園田学園女子大学　学長 （民俗学）
8	歴　　史	市澤　哲	神戸大学大学院人文学研究科教授 （中世史）
9	歴　　史	藪田　貫	兵庫県立歴史博物館館長 （近世史）
10	歴　　史	黒崎　直	大阪府立弥生文化博物館名誉館長 （考古学）
11	歴　　史	菱田哲郎	京都府立大学文学部教授 （考古学）
12	記念物	林　まゆみ	一般社団法人 みどり・人・まち研究所　代表理事 兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科元教授 （庭園史）
13	記念物	石丸　京子	県立尼崎の森中央緑地　生物多様性 チーフコーディネーター （植物学）

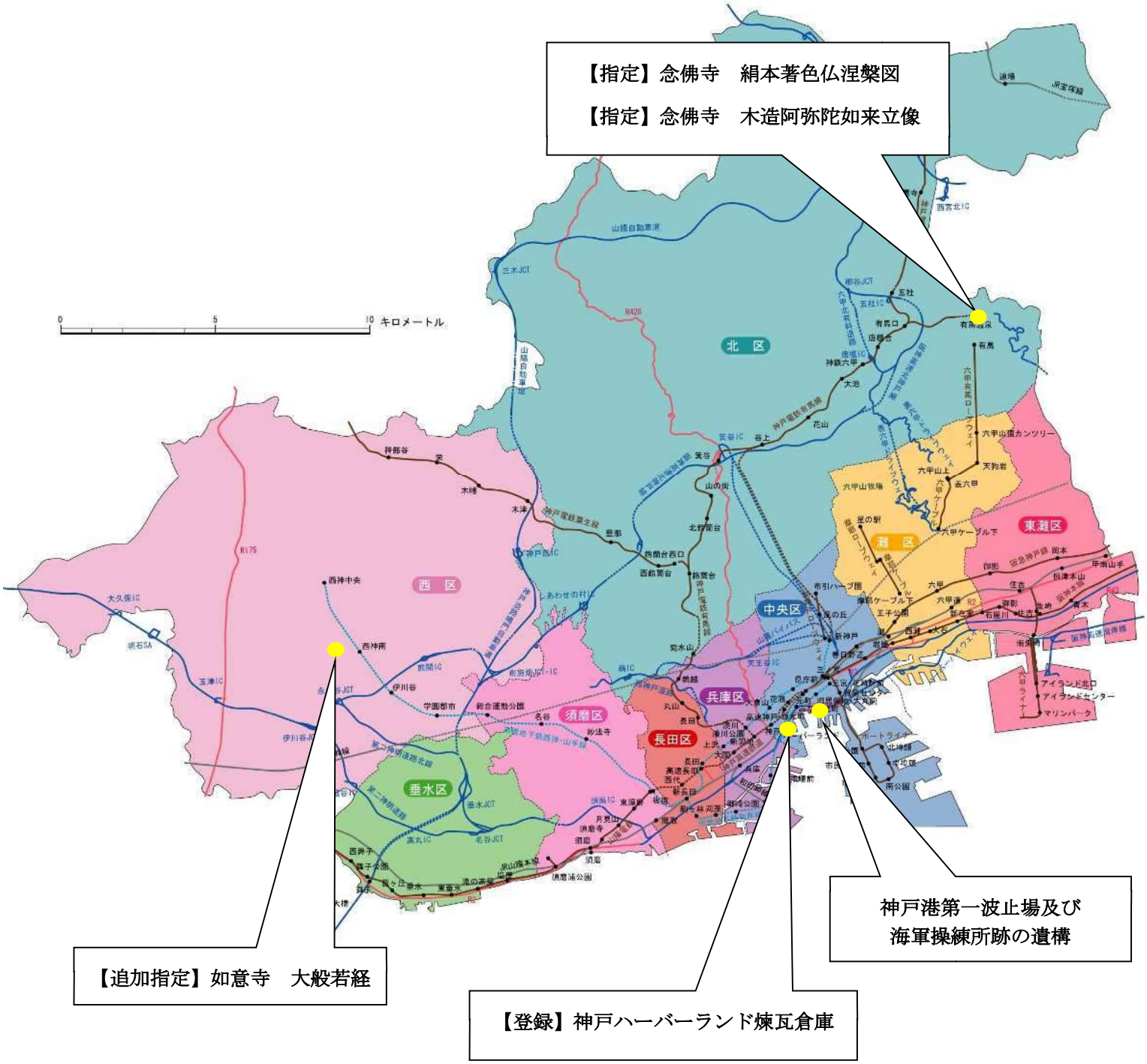
※１～４の委員が伝建部会委員

令和６年度神戸市指定文化財等答申物件一覧

種類			名称	数量	所在地
			所有者（管理者）		概要
指定	有形文化財	絵画	絹本著色仏涅槃図	１幅	北区有馬町 1641
			宗教法人　念佛寺		（年代） 鎌倉時代末期～南北朝時代 （14 世紀前半）
		彫刻	木造阿弥陀如来立像	１軀	北区有馬町 1641
			宗教法人　念佛寺		（年代）鎌倉時代 （13 世紀前半～半ば）
		書跡・古文書	（追加指定）　大般若経 附 絹本著色釈迦三尊十六善神図・経箱・経帙	（追加指定） 附 絹本著色釈迦三尊十六善神図１幅、経箱　12 点、経帙　60 点	西区櫨谷町谷口 259
			宗教法人　如意寺		（年代） 絹本著色釈迦三尊十六善神図 鎌倉時代後半から南北朝時代 （13 世紀後半～14 世紀前半） 経箱・経帙 江戸時代 大般若経【参考：指定済】 平安時代後期～江戸時代
登録	有形文化財	建造物	神戸ハーバーランド煉瓦倉庫	２棟	中央区東川崎町１丁目 75 番地 3、94 番
			神戸市		（年代）明治 30 年（1897 年）ころ

	神戸港第一波止場及び 海軍操練所跡の遺構		中央区新港町 16 番地
	神戸市		（年代）江戸時代末期～明治時代

令和６年度　神戸市指定文化財等答申予定物件位置図



指　定　等　件　数　一　覧

種類			令和５年度までの累計	今回答申件数	合計
指定	有形文化財	建造物	２５	－	２５
		絵画	１１	１	（１２）
		彫刻	２４	１	（２５）
		工芸品	７	－	７
		書跡・古文書	６	（附１）	（６）
		歴史資料	１	－	１
		考古資料	１５	－	１５
		石造物	１５	－	１５
	民俗文化財	有形民俗	１	－	１
		無形民俗	１	－	１
	史跡名勝天然記念物	史跡	８	－	８
		名勝	６	－	６
		天然記念物	７	－	７
小計			１２７	２（附１）	（１２９）
登録	有形文化財	建造物	１９	１	（２０）
	民俗文化財	無形民俗	２４	－	２４
小計			４３	１	（４４）
認定	地域文化財	無形民俗	４	－	４
		史跡	１１	－	１１
小計			１５	－	１５
指定	文化環境保存区域		９	－	９
選定	歴史的建造物		４７	－	４７
合計			２４１	３（附１）	（２４４）

指定有形文化財
絵　　画

絹本著色仏涅槃図　１幅

所在地　　北区有馬町１６４１
所有者　　宗教法人　念佛寺
制作年代　　鎌倉時代末期～南北朝時代（14 世紀前半）

［法　量］（単位cm）
本　紙：縦（発装から軸端）255.4×横（描表装を含む本紙）175.0
　　四副一舗（各副の幅は左より 43.0、44.5、45.0、42.5）
表装幅：179.0　　軸　長：186.7

［図　様］
縦長の画面中央の牀台には、右手を枕に横たわる釈迦を描く。牀台の周囲には、菩薩、諸天、仏弟子、俗人等が釈迦の涅槃に嘆き悲しむさまざまな姿態で描かれている。牀台前方には、金剛力士、迦陵頻伽、鳥獣や虫等が描かれる。釈迦の頭部後方の牀台上には、釈迦の衣鉢が置かれる。画面右上の虚空には月が浮かぶ。釈迦の涅槃とともに、緑から白へと葉の色を変化させる沙羅双樹を８本描く（左に緑色の４本、右に白色の４本）。沙羅双樹の樹木あたりから、左右計４つの雲氣が湧きおこり、背景には跋提河が描かれる。右上からは、雲に乗った摩耶夫人の一行が息子の死に際し忉利天より駆けつけてくる様子が描かれている。牀台の右手前に、墨染の衣を着て、両袖で口元を覆う尼僧と下を向き合掌する尼僧が描かれる点が特徴的である。周囲には大ぶりの牡丹の描表装をめぐらせる。

［表現・技法］
【画絹】
目の詰んだ上質の画絹が用いられる。
【摩耶夫人一行】
二条の尾を引く雲に乗り、阿那律、摩耶夫人、侍女６人が降下する様子が描かれる。肉身線は、細い墨線で描き起こし、着衣は肥瘦のある墨線で表す。摩耶夫人と侍女６人は宋風の衣装で、沓裏の一部、頭飾、香炉は金泥で彩色される。摩耶夫人は袖を顔に当て、釈迦入滅の哀しみを表現する。
【釈迦】
右手を枕にして、左手を体側部に沿わせ、牀台の上の裂に横たわる。釈迦の肉身には金泥を施し、輪郭を細く均一な朱線で描き起こす。大衣、覆肩衣、下衣、裳を着す。胸部から腹部が大きく露出するような着衣形式とする。着衣の輪郭線、衣文線、衣の継ぎ目を表す線には太い截金を捺す。着衣には金泥により繊細な文様が表される。釈迦の頭部の螺髪は大ぶり

に表現される。肉髻（群青の彩色は一部後補）は低平で、髪際線（緑青）が大きく波うち額が広く表現される。肉髻珠は大きく表され、朱で彩色する。眉は、上層から墨―緑青の二層で彩色され、眉頭と眉山が接近し、眉尻に向かってやや下降するラインを描く。朱線で眼窩線を表し、眼はやや開くように表現される。鼻は朱線で鼻梁を描き起こす。唇は朱で彩色し輪郭線は表さず、上唇と下唇の合わせ目に墨線を引く。

【菩薩・諸天・俗人・金剛力士】

各モチーフを截金、金泥、裏彩色、色線を用いながら濃彩で表す。涅槃の意味を理解した菩薩衆の理知的な表情とそれ以外の存在の哀しみを見事に描き分ける。菩薩の肉身は、胡粉による白系統と、金泥による金色身の二様に描き分けられる。釈迦の枕元に位置する金色身の弥勒菩薩と、その後方に位置する合掌する観音菩薩（蓮華座に坐す）、牀台手前で宝珠を奉持する地蔵菩薩がとりわけ強調されている。釈迦の足を第三目を有する天部形がさする点、牀台後方手前に墨染の衣を着た僧侶２人を描く点は特徴的である。

【鳥獣・虫】

約 40 の鳥獣・虫が濃彩で表現される。鎌倉時代以降の涅槃図に共通するモチーフが多いが、こちらをじっと見つめるような虎、うずくまるような洋犬などは本作品の特色である。

［特　色］

摂取山光明院念佛寺は浄土宗鎮西派の寺院で、天文７年（1538）、岌誉惠林（？～1558）を開基として有馬・谷之町に創建された。慶長年間には、豊臣秀吉の正室・北政所の別所跡である現在地へ移転。元禄 16 年（1703）、有馬の大火では念佛寺も類焼し、現在の本堂は正徳元年（1711）に上棟、翌２年（1712）に竣工した。有馬では現存最古の建造物と伝えられる。

本作品は、その念佛寺に伝来した仏涅槃図である（以下、念佛寺本）。仏涅槃図に関する研究では、釈迦が横たわる牀台の向きにより、向かって右側をみせる第一形式（平安時代の作例に多い）、向かって左側をみせる第二形式（鎌倉時代以降に多い）に分類される。念佛寺本は第二形式に分類されるが、とりわけ構図、図様、細部描写などは、命尊筆「絹本著色仏涅槃図」（重要文化財、元亨３年（1323）、九州国立博物館蔵：以下、九博本）を彷彿とさせる。

命尊（生没年不詳）は鎌倉～南北朝期の絵仏師として知られ、奈良・興福寺を中心に南都で活躍した。命尊筆の記録のある仏涅槃図としては、前出の九博本のほか、兵庫・妙法寺の仏涅槃図（丹波市指定、正中２年［1325］：以下、妙法寺本）が確認されている。また、これ以外に類似の作風を持つものとして、ニューヨーク・メトロポリタン美術館所蔵本やワシントン・フリーアギャラリー所蔵本なども知られている。これらは、図様構成に多少の違いは見られるものの、濃密な彩色による華やかな画面や、流麗で発色の良い金泥の使用法などに共通性を持ち、いずれも同一工房の作と考えられている。念佛寺本も、これらと衣文の文様や人物表現などに類似が見られることから、14 世紀前半の命尊周辺の制作と想定しておきたい。

九博本、妙法寺本が、もともと奈良・法華寺の尼僧のために描かれたもので、ともに律僧

により開眼供養がなされている点は注意されよう。念佛寺本には、九博本・妙法寺本と同様に、牀台の右手前に墨染の衣の二人の僧（尼僧か）が描かれているが、黒衣は律僧などの遁世僧を示すとされているものである。念佛寺本も、元は律僧のために作られた可能性がある。

有馬では、弘安４年（1281）に叡尊（1201～90）が温泉寺を来訪し、堂供養、授戒を行って以降、律宗の影響が強まり、律宗寺院がつくられていった。有馬・温泉寺に伝来した「銅製経箱」（兵庫県指定、（一社）有馬温泉観光協会蔵）も鎌倉時代、13 世紀の製作と推定されるもので、製作技法・意匠表現の類似から、真言律宗の僧侶の関与が推定されている。

念佛寺には古文書類がほとんど伝存せず、伝来の経緯は定かでない。従って、律宗との関りは具体的には明らかにできないが、有馬の律宗寺院に伝来した仏涅槃図が、いずれかの事由（有馬では火災がたびたび発生し、寺院も焼失している）により、天文７年の創建以降に念佛寺へ移されたとも考えられる。

なお、近世地誌類を確認すると、念佛寺の仏涅槃図は什物として知られていたことがわかる。『有馬山温泉小鑑』（貞享２年（1685）刊）は狩野派、『摂陽群談』巻 15（元禄 11 年（1698）序）は狩野元信の作と伝え、本作品の作者比定とは相違がある。一方、『有馬温泉古由来』（享保２年（1717）刊）は「唐絵のねはんぞう」と記しており、こちらの記述の方が本作品に近しい。念佛寺は元禄８年に諸道具含めて全焼したとの記録（「念佛寺文書抄」〔長濃丈夫『有馬温泉史年表』有馬町活性化委員会、平成 12 年〕に抜粋あり）が確認されていることを勘案すると、当初、念佛寺には狩野派の涅槃図が伝来したが、元禄８年の大火で焼失。その後の復興に際して、他寺院から念佛寺本の仏涅槃図がもたらされたと考えることもできるだろう。

本作品は、14 世紀前半、命尊周辺での制作が想定され、すぐれた出来栄えを示しながら、今まで存在が把握されていなかった。現在もなお涅槃会に用いられる点も重要である。伝来については、さらなる文献調査が必要となるが、現在の本堂が再興した 18 世紀前半には念佛寺の什物として伝来したと考えられる。一方で、経年劣化により、本紙料絹の折れ、欠損、発装や軸木の糊離れなど、保存状態に課題があり、保存修理の緊急性も高い。神戸の美術史、歴史を物語る重要な作品であり、神戸市指定文化財として保護することが求められる。

［関連文献］

『有馬山温泉小鑑』菊屋五郎兵衛、貞享２年（1685）刊

一　念佛寺は浄土宗なり。南むきに立給へり。本尊は御たけ三尺の如来あんなみの作なり。狩野の筆の涅槃像あり。第一の什物なり。

「念佛寺文書抄」（長濃丈夫『有馬温泉史年表』（有馬町活性化委員会、平成 12 年））

元禄亥年類火諸道具悉焼失、祠堂屋敷茅ノ坊ニ白銀参拾ニ而壱ヶ所渡之、其料ニテ三間五間之仮屋掛建テ、仝年八月十八日入院

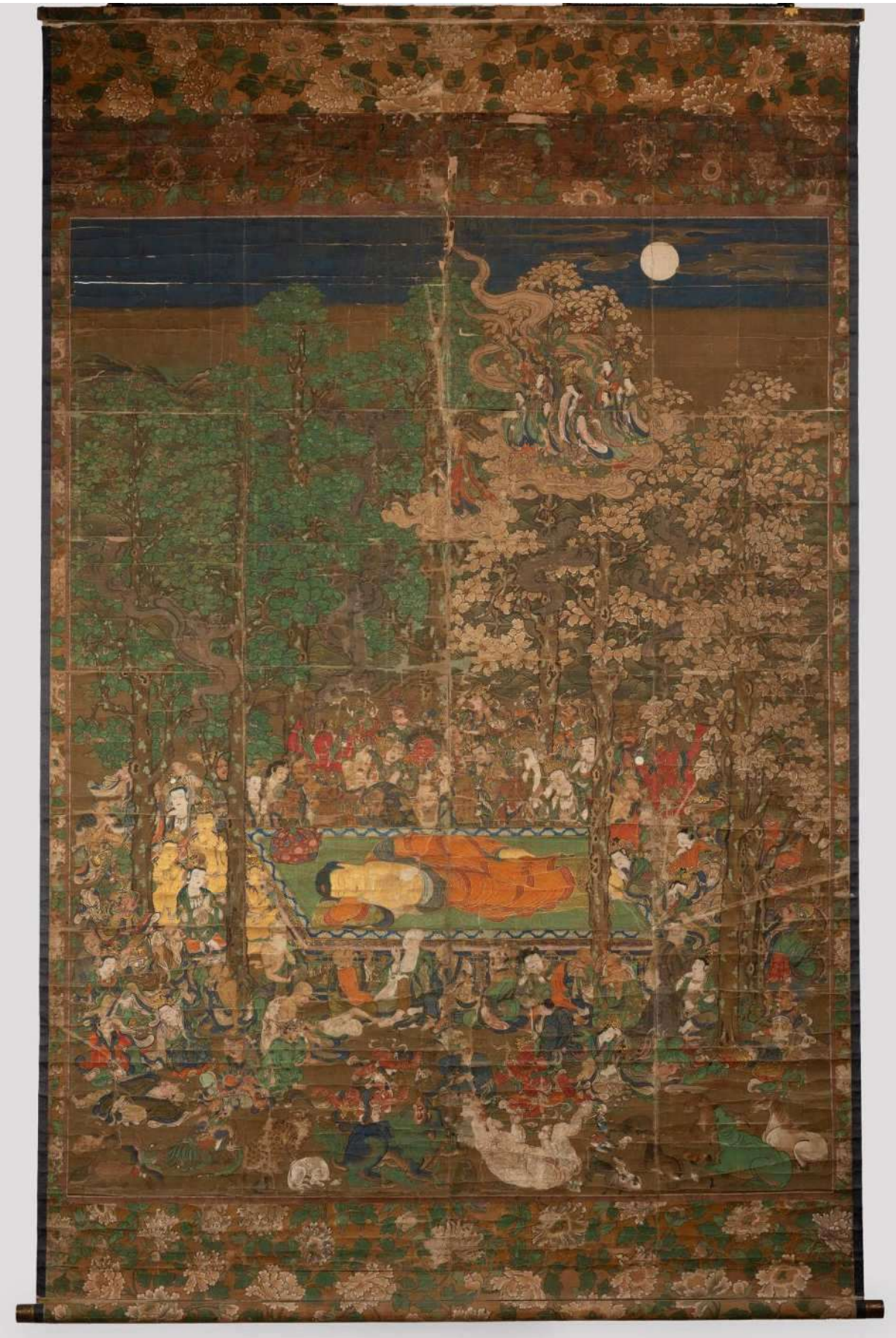
『摂陽群談』巻 15、元禄 11 年（1698）序

念佛寺　同所（注：有馬郡湯山）ニ相並リ。本尊弥陀［立像三尺］尊像ヲ安置ス。安阿弥

所造ノ仏也。狩野古法眼所画之涅槃像アリ。有野村正楽寺ヲ末寺トス。浄土宗也。

『有馬温泉古由来』享保２年（1717）刊

念佛寺ハ浄土宗。本尊脇立安阿弥の御作之。唐絵のねはんぞう什物に有。其外霊宝多し略之



絹本著色仏涅槃図

指定有形文化財
彫　　刻

木造阿弥陀如来立像　１軀
（もくぞうあみだにょらいりゅうぞう　く）

所在地　　北区有馬町１６４１
所有者　　宗教法人　念佛寺
制作年代　　鎌倉時代（13 世紀前半～半ば）

［法　量］（単位cm）
像　高　99.1（３尺２寸７分）　　髪際高　91.1（３尺１分）
頂ー顎　18.2　　面　長　10.0　　面　幅　10.0　　面　奥　12.1
耳　張　13.6　　胸奥（左）16.4　　胸奥（右）16.5　　腹奥（含、衣）17.4
肘　張　29.7　　袖先張　29.8　　裾　張　26.3　　足先開（外）17.0
光背高　131.5　　台座高　59.9

［品質構造］
針葉樹（ヒノキか）。割矧ぎ造か。内刳。漆箔。玉眼。
像の表面は頭髪を除き、肉身、着衣ともに錆下地に黒漆塗りを施したうえ、金箔押しとする。螺髪は一個ずつ別製のものを貼り付ける。頭・体の幹部は、両耳後を通る線で前後に矧ぐ。衲衣の下縁に沿って、裙以下の部位を矧ぐ。この部分は、像底で見ると中央で前後に割り矧いでいる。裙以下を体幹部から割り矧いでいると見ると、全体が割り矧ぎと考えられるが、確定はできない。
像内は内刳し、玉眼（黒目を赤で括る）を嵌入する。三道下で割首する。両肩以下も適宜矧ぐ。裙以下の部位をなす材から両足枘（黒漆塗り）を作り出し、これに両足首以下を別材で長靴状に作り、角枘孔を穿って貫き通し、足首上面を像底に接着する

［形　状］
髪際高で法三尺となる阿弥陀如来立像。左手は垂下、右手は屈臂し、ともに第１・２指を曲げ、来迎印を結ぶ。左足を前に踏み出し、蓮華座（後補）上に立つ。足の動きに対応し、背面で左肩後方から右臀部横へと収斂する衣文を表す。
螺髪は旋毛形。髪際第１列の螺髪は下方を向かず、後頭部では逆Ｖ字形に割り付ける。肉髻珠（水晶製）、白毫（同）を表す。耳孔、鼻孔は窪めるのみで、像内に貫通しない。耳朶は紐状で貫通する。顎の括りを一条表す。唇は上、下ともに細紐状に縁取る。三道を表す。胸の括りを左右各一条表す。腹の括りは見えない。左肩から右腋にかけて縁の見える内衣を着ける。両肩から覆肩衣を着け、右脇腹で弛みを作り、衲衣の縁にたくし込む。衲衣（袈裟）を偏袒右肩に着け（右肩に懸ける）、腹前から左肩にかけて縁を一枚折り返す。末端は左右とも肘を覆いつつ垂下する。裙を着け、右脛前で右を前に合わせる。

［特　色］

摂取山光明院念佛寺は浄土宗鎮西派の寺院。天文７年（1538）、岌誉惠林（？～1558）を開基として有馬・谷之町に創建されたという（『摂州蓮宗精舎旧詞』）。慶長年間には、豊臣秀吉の正室・北政所の別邸跡である現在地へ移転。元禄８年（1695）有馬の大火で念佛寺は諸道具を含めて焼失し、仮殿を建てた。同 16 年（1703）、にも火災で類焼し、現在の本堂は正徳元年（1711）上棟、翌２年（1712）の竣工である。有馬では現存最古の建造物と伝えられる。

木造阿弥陀如来立像は、念佛寺の本尊として本堂須弥壇上の厨子に脇侍（木造観音・勢至菩薩像。いずれも後補）とともに安置されている。端正な容貌、バランスのとれた体型、やや複雑な衣文を破綻なく刻む彫技に、作者の技量がよくうかがわれる。『有馬山温泉小鑑』、『摂津名所図会』等の近世地誌は、本尊は安阿弥すなわち鎌倉時代の仏師・快慶の作としている。ただ、容貌はどちらかといえば男性的である点、両肩を覆う覆肩衣に加えて右肩に衲衣を懸ける表現なども、快慶の創始したいわゆる安阿弥様の作品とは異なり、運慶系統の仏師の作と目されている像、すなわち延応２年（1240）慶俊作の三重・専修寺阿弥陀如来立像［重文］、正嘉２年（1258）京都・報土寺阿弥陀如来立像［重文］、貞永元年（1232）愛知・宝勝院阿弥陀如来立像［重文］などに共通する。このことから、本像は 13 世紀第２四半期から同世紀半ば頃の制作と推測される。

さらに、構造技法において注目されるのは、本像は衲衣の下縁に沿って、裙以下の部位を幹部材からの割り矧ぎないし別材製とする点である。同等の構造を有する作として、岡山・宝積院阿弥陀如来像（安貞２年（1228）か［岡山市指定］）は裙以下が別材製と報告されており、滋賀・西勝寺阿弥陀如来立像（建仁３年（1203）［重文］）は裙に囲まれた肉身部分のみを矧ぐ。また、両足首以下を別材で作り、像底から作り出した角枘を貫き通す仕様は、仏師・善慶（善円）の作である奈良・西興寺地蔵菩薩立像［奈良県指定］が挙げられる。制作年は定かでないが、善円から善慶への改名が宝治元年（1247）以降であり、没年が正嘉２年（1258）であるから、やはり 13 世紀半ば頃の作と考えられる。

以上をまとめると、本像は運慶様を踏襲した作例であり、13 世紀第２四半期から半ば頃の制作と推定される。螺髪の一部や両手指先等に後補の部位が認められ、面部の漆箔は浮き上がりがやや進行しているものの、彫刻としての完成度も高く、特徴ある構造技法を示す鎌倉時代の優品であり、神戸市指定文化財にふさわしいと考えられる。

［関連文献］

『摂州蓮宗精舎旧詞　第十一冊　摂津』元禄９年（1696）（『浄土宗全書　続 18』）

念佛寺　知恩院末　摂州有馬郡湯山町摂取山念佛寺

開山岌誉惠林大徳、生国姓氏不知、開山剃髪之所幷師範不明白、開山当寺在住九年、遷化者永禄元年三月朔日、今年迄凡一百四十一年也、当寺起立者天文七戌年、今年迄凡一百五十有余年也、元禄九丙子五月

『有馬山温泉小鑑』菊屋五郎兵衛、貞享２年（1685）刊

一　念佛寺は浄土宗なり。南むきに立給へり。本尊は御たけ三尺の如来あんなみの作なり。狩野の筆の涅槃像あり。第一の什物なり。

『摂陽群談』巻 15、元禄 11 年（1698）序

念佛寺　同所（注：有馬郡湯山）ニ相並リ。本尊弥陀［立像三尺］尊像ヲ安置ス。安阿弥所造ノ仏也。狩野古法眼所画之涅槃像アリ。有野村正楽寺ヲ末寺トス。浄土宗也。

『有馬温泉古由来』享保２年（1717）刊

念佛寺ハ浄土宗。本尊脇立安阿弥の御作之。唐絵のねはんぞう什物に有。其外霊宝多し略之

秋里籬島編『摂津名所図会　巻九　有馬郡・能勢郡』寛政８年（1796）刊

念佛寺　同所（注：温泉寺の東）にあり。摂取山光明院と称す。浄土宗鎮西派。

本尊阿弥陀仏［安阿弥の作。長弐尺五寸評］　開基岌誉上人

木造阿弥陀如来立像

正面

左斜側面

右斜側面

左側面

右側面

背面

面部　正面

像底

指定有形文化財
書跡・古文書
（追加指定）

大般若経（だいはんにゃきょう）

附　(1) 絹本著色釈迦三尊十六善神図（けんぽんちゃくしょくしゃかさんぞんじゅうろくぜんしんず）　1幅（ふく）
(2) 経箱（きょうばこ）　12点
(3) 経帙（きょうちつ）　60点
（指定済：大般若経　600帖）

所在地	西区櫨谷町谷口259（如意寺）
所有者	如意寺
年代	(1)鎌倉時代後半から南北朝時代（13世紀後半～14世紀前半） (2)・(3) 江戸時代後半
法量	(1)縦130.0×横77.0㎝（本紙） (2)幅54.7×高さ22.8×奥行28.4㎝ (3)横9.5×縦24.5×高さ17.5㎝（経典を収めた状態） 横58.8×縦24.5㎝　（広げた状態）
品質・構造	(1) 絹本著色　掛軸装（二副一舗） (2) 木製　漆塗り (3) 木製　表面：布張　裏面：紙張（キラコ入り）

１．大般若経概要

当該大般若経（以下、「本経」と略記）は、神戸市西区の如意寺に伝わる市内に類例のごくわずかな平安時代後期の紀年銘をもつ経巻を含む600巻が揃う書写経である。奥書にみる「常隆寺」・「中山寺」などの記載から、その来歴は西摂から東播の寺院ネットワークがあったことを示している。また、補修の痕跡は、経典に対する人々の意識、信仰のあり方を物語っている。さらに寺院を支える地域の人々の努力によって今日に伝わったことからも、本経は貴重な文化財といえ、令和6年4月9日付けで神戸市指定有形文化財（書跡・古文書）に指定された。

なお、如意寺には、大般若経転読の本尊とされる釈迦三尊十六善神図も伝わっており、経箱及び経帙とともに本経に関連する貴重な文化財である。

２．絹本著色釈迦三尊十六善神図、経箱、経帙

(1) 絹本著色釈迦三尊十六善神図

概要

大般若経転読の際の本尊画像として使用される釈迦三尊十六善神画像である。

画面中央の台座上に頭・身光（大円相の身光の中に頭光が納まる形式）を負った釈迦如来を描き、その下方左右に、上方から騎象普賢・騎獅文殊、老相の僧形（法涌菩薩カ）・第三目を有する天部形（常啼菩薩あるいは帝釈天あるいは梵天カ）、玄奘三蔵、深沙大将を対で描く。それらの尊像の左右両外には、８体ずつ十六善神を描く。十六善神のうち、四隅に四天王が配される。四天王は、左上に毘沙門天、左下に広目天、右上に持国天、右下に増長天という配置で描く。

釈迦の頭上には天蓋が描かれ、台座下には白い雲気が描かれる。

絵画の特徴

・目の詰んだ上質の絹を基底とする。

・墨書きのあと、濃彩を施し、朱線または墨線による描き起こしとする伝統的な仏画の技法が用いられる。十六善神の一部に肥痩のある描線がみられる。

・天蓋（何重もの幕が付属し、傘骨の先端の鳳凰から垂飾が垂下する形式）、身光・頭光、重層的な台座（中間の区画に向かってやや左を向いた大きな頭部と後脚を表しうずくまる獅子を表す）など中国・南宋末から元代の絵画に近い。

所見

以下、類似例である山梨・一蓮寺蔵釈迦三尊十八羅漢図（以下、「一蓮寺本」と略記）、播磨町・円満院釈迦三尊十六善神画像（以下、「円満院本」と略記））と比較し、当絵画の所見を述べる。

・釈迦が大衣（朱に金泥文様）、覆肩衣（緑で縁が白）、内衣（結び紐つき）、裳（緑で縁が白）を着し、それらの末端が、蓮華座を覆うようにかかる形式も一蓮寺本、円満院本に近い。

・釈迦の頭部は、低平な肉髻、大ぶりの肉髻珠、正面髪際の両端が広いという特徴をもち、南宋仏画の直模として知られる太山寺釈迦三尊像から、一蓮寺本、円満院本などに認められる元代様式への過渡的様相を示す。

・十六善神などにみられる誇張した表情や身振り、習熟した金泥線の技法など、中国・元代の仏画に通じる。

・釈迦の台座の区画にみられる当初の金箔の質は高く、鎌倉時代の作例に通じる。

・補筆、補彩が随所に認められ、より詳細な調査・研究が求められるものの、制作年代は鎌倉時代後半から南北朝時代と推定される。なお、如意寺に伝わる『天保十一年比金山如意寺寺社御改帳』には文化年中に修理を行った旨の記述がみられ、その際に補筆等が行われた可能性がある。

・すでに指定された如意寺蔵大般若経転読時の本尊として懸用された可能性が高い絵

画であり、本経の附として追加指定することに相応しいと考えられる。

【(2)・(3)経箱及び経帙】

本経の帙は、折本装の大般若経 10 帖を納める無双帙である。表表紙に「大般若波羅密多経」と、その下に丸囲みの千字文を印字した題箋を貼る。こはぜにより二箇所で留めることで大般若経を格納する。こはぜや留め紐などが欠損しているものもあるが、比較的保存状態は良好である。

また、経箱は、先述の経帙を５帙ずつ納めることが可能で、経帙の下には直径約 2.0 ㎝の穴を開けた板を敷き、経帙を引き出しやすくしている。箱の落とし蓋には、箱に収納された５帙の千字文と箱の番号である十二支の漢字一字を記している。落とし蓋の把手や飾りが一部欠損しているものがあるが、全体として保存状態は良好である。

奥書によれば、本経は天保 14 年（1843）から嘉永 3 年（1850）年にかけて、塔頭寺院の僧侶や明石城下の商人らの書写による補巻が行われている。また、『天保十一年比金山如意寺寺社御改帳』の下書きとおぼしき帳面にある「一　大般若経六百巻（ここ）〇（全部）古筆写巻　右大破ニ付去ル子年ハ〇（折本ニ）修復成ス」との記載から、文政 11 年（1828）もしくは、天保 11 年（1840）より折本装に改修されたと考えられる。詳細は不明であるが、補巻と修復とは一連の事業であったと考えるのが自然であろう。本経帙及び経箱は、折本装の経典を納めるための仕様であり、この時の経典の改装に合わせて作成されたものと考えられる。

したがって、経箱及び経帙は、本経が折本装に改装された本経にかかる継承の歴史を示す資料として、本経の附として追加指定することに相応しいと考えられる。

参考資料

大般若経及び絹本著色釈迦三尊十六善神図関連の記載抜粋

【大般若経修理に関する記述】※必要部分抜粋

（１）『天保十一年比金山如意寺寺社御改帳』　　1840 年

宝物

「一　大般若経六百巻（全部）〇 古筆写巻　右大破ニ付去ル子年ゟ（折本ニ）〇 修復成ス」

※子年→文化 13 年（1816）文政 11 年（1828）天保 11 年（1840）

嘉永 5 年（1852）等

【絹本著色釈迦三尊十六善神図に関する記載】※必要部分抜粋

（２）『天保十一年比金山如意寺寺社御改帳』　　1840 年

宝物

「一　涅槃像　　同　　大唐呉道士筆

右文化年中修覆成ス

一　十六善神　　同　　同　筆

右同断　　」

（３）『如意寺宝蔵聖教目録』年代不明

「善神像一補」

引用文献

（１）～（３）「如意寺　所蔵文書」『神戸市文献史料　第十五巻』神戸市教育委員会　1995

附指定資料画像

・絹本著色釈迦三尊十六善神図

釈迦如来部分

台座部分

釈迦如来大衣金泥文様

深沙大将

玄奘三蔵

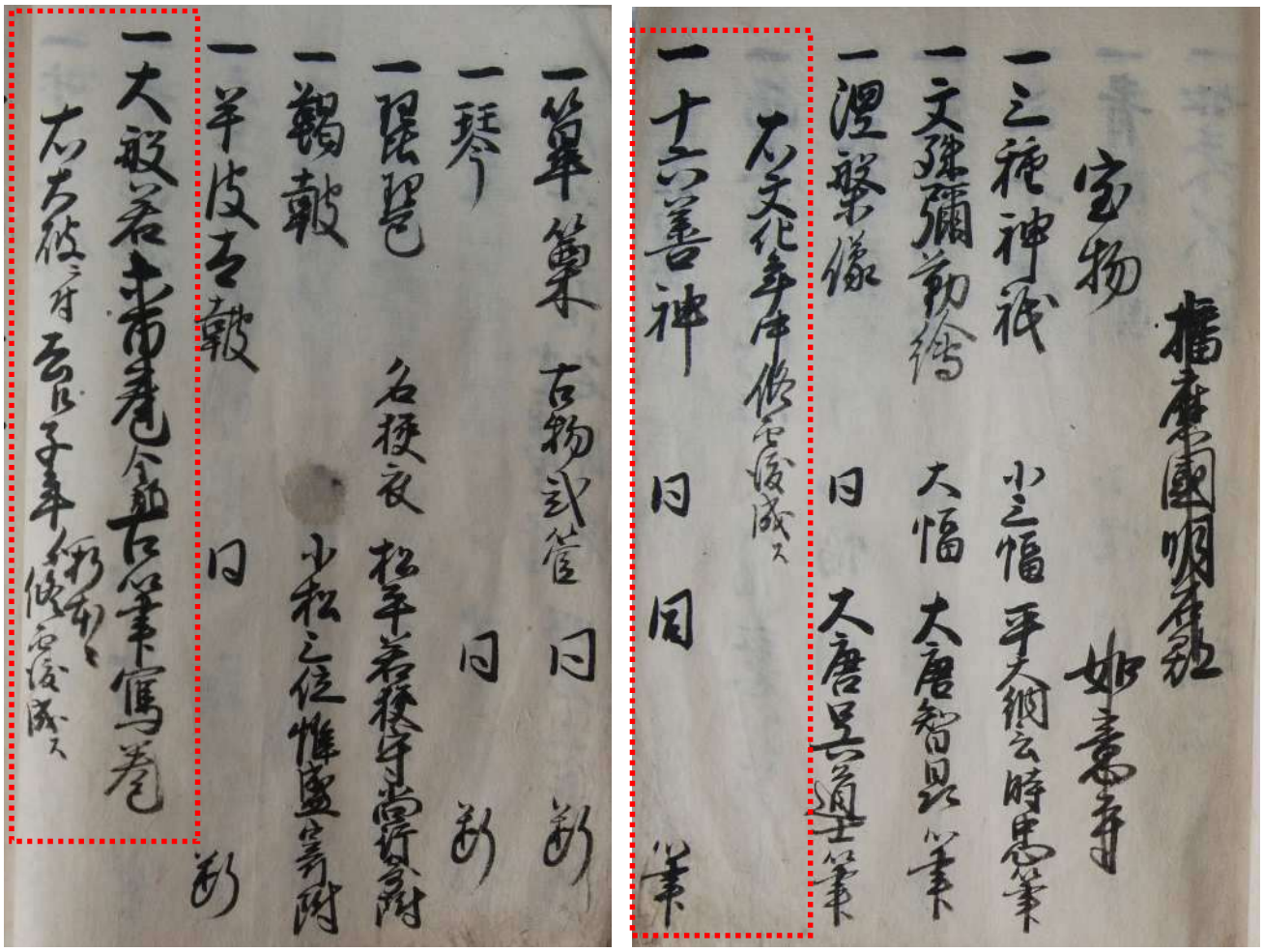
善神

(2)経箱

(3)経帙

参考

『天保十一年比金山如意寺寺社御改帳』一部



登録有形文化財
建　造　物

神戸ハーバーランド煉瓦倉庫（旧三菱倉庫）北棟・南棟
（れんがそうこ）
２棟

所 在 地	中央区東川崎町１丁目７５番地３、９４番
所 有 者	神戸市
構造形式	北棟　煉瓦造（鉄骨補強済）、平家建、寄棟屋根、鋼板瓦棒葺
	南棟　煉瓦造（鉄骨補強済）、平家建、寄棟屋根、鋼板瓦棒葺
建築年代	明治 30 年（1897 年）ころ
面　　積	北棟　床面積 978.52 ㎡（東西約 33.6m、南北約 29.1m）
	南棟　床面積 925.12 ㎡（東西最大約 39.9m、南北最大約 30.0m）
設計者・施工者	不明

神戸ハーバーランド煉瓦倉庫は、神戸市中央区東川崎町１丁目の高浜地区（JR 神戸駅の東、高浜岸壁の西）の海岸に面するように、２棟南北に並ぶように所在している。

建築年代は明確ではないが、高浜地区において倉庫業を始めた日本貿易倉庫株式会社は、明治 29 年（1896 年）に設立され明治 31 年（1898 年）末に倉庫約 10000 坪、明治 33 年（1900 年）６月末には倉庫約 16000 坪を所有し、米穀・砂糖その他の雑貨などを扱っていた。明治 35 年（1902 年）に、土地・倉庫などの売買契約が東京倉庫株式会社（後の三菱倉庫株式会社）と結ばれている（ただし登記は三菱合資会社名義となっている）。この時買収された倉庫の中に、この煉瓦倉庫が含まれていたと考えられる。

大正２年（1913 年）にはこの地の東側に高浜岸壁を設けて大規模に埋め立て、倉庫地区が拡張されている。昭和 63 年（1988 年）にこの煉瓦倉庫２棟は神戸市に寄附されたが、高浜地区における倉庫群はこの２棟を残して神戸ハーバーランド地区として再開発され、平成４年（1992 年）に街開きしている。

建物構造は２棟ともに、煉瓦造、平家建、寄棟屋根、ガルバリウム鋼板瓦棒葺である。

平面形的には、北棟は一般的な倉庫の平面形態である矩形を呈している。一方、南棟は岸壁の制約を受けて南東角が斜めに整形されており、両棟の平面形的な差となり大きな特徴にもなっている。

内部については、北棟は矩形を呈する煉瓦造外壁の内部に「＋」形の煉瓦内壁を配し、東側の内壁には開口部を設けている。南棟もほぼ同様であるが、南北方向の内壁は少しずれ、北側の内壁には開口部を設けない。これは平面形の影響を受けた可能性が考えられる。

平成２年（1990 年）には鉄骨による構造補強が実施され、この際に出入り口も当初デザインを意識しながら改修されている。この時に構造補強が行われたことで、平成７年（1995 年）の阪神・淡路大震災においても倒壊を免れることができたと考えられる。

設計者・施工者はともに不明である。

煉瓦はイギリス積で積まれており、使用された煉瓦は長手寸法平均 22.3 ㎝、小口寸法平均 10.7 ㎝、厚さ平均 5.9 ㎝で、南北棟ともほぼ同じサイズの煉瓦が使用されている。壁の厚さは煉瓦１枚半で約 34 ㎝である。製造会社については不明である。

平成２年の改修の際には鉄骨による構造補強以外に、今後の活用を見据えて出入り口を当初の意匠を意識した扉に改修している。また、小屋組も鉄骨補強が施されたが、木造の小屋組も残存しており、当初の小屋組を残しながらの補強が行われたことがわかる。

神戸開港後の港湾施設としての倉庫群を中心とした高浜地区は、神戸ハーバーランド地区として再開発された。その結果、明治時代の神戸港の面影を残す建造物は、この２棟の煉瓦倉庫のみになっている。改修が施されたとはいえ、ほぼ当初の姿を保っている意義は大きい。

神戸市所有後の平成２年以後は、神戸ハーバーランド煉瓦倉庫として飲食店などに転用され、市内における歴史的建造物を活用した嚆矢としてもよく知られている。平成 19 年（2007 年）には、海岸部に残る明治時代の神戸港の景観を留める建造物であるとして、神戸市の景観形成重要建築物（現景観資源）に指定されている。

神戸ハーバーランド煉瓦倉庫は、明治時代の神戸港の発展を支えた歴史を今に伝える重要な歴史的建造物として、神戸市の登録有形文化財にふさわしいといえる。

〔参考資料〕

『日本倉庫業史　改訂版』社団法人日本倉庫協会　昭和 45 年（1970 年）

『三菱倉庫七十五年史』三菱倉庫株式会社　昭和 37 年（1962 年）

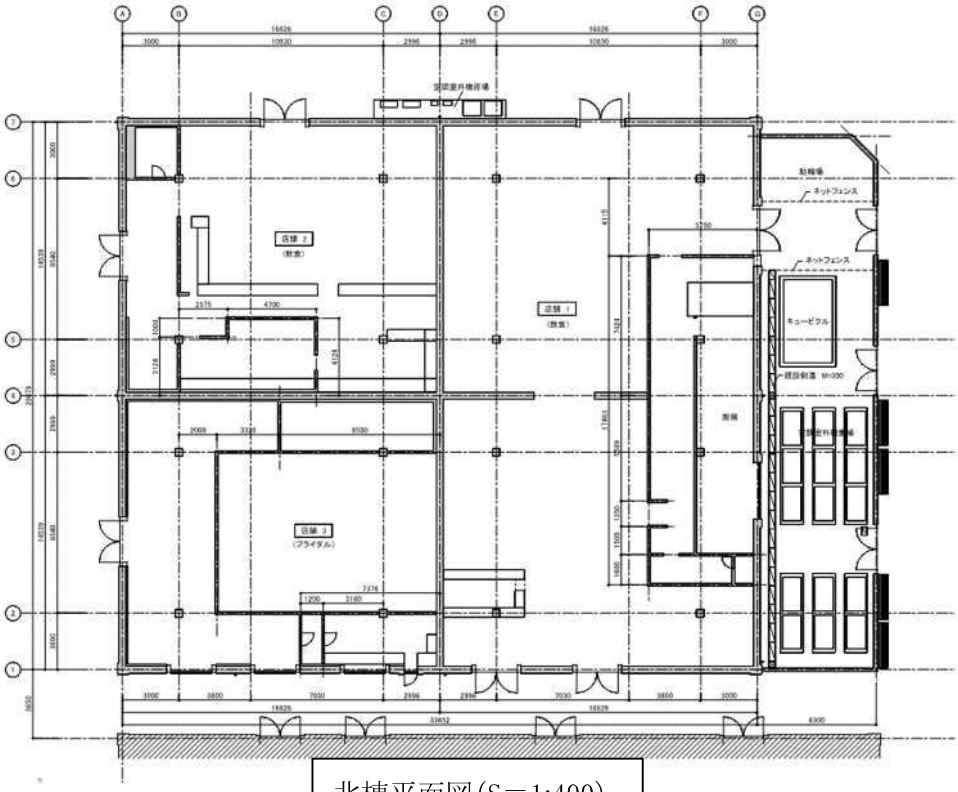
『三菱倉庫百年史』三菱倉庫株式会社　昭和 63 年（1988 年）

『三菱倉庫百年史ー編年史・資料ー』三菱倉庫株式会社　昭和 63 年（1988 年）

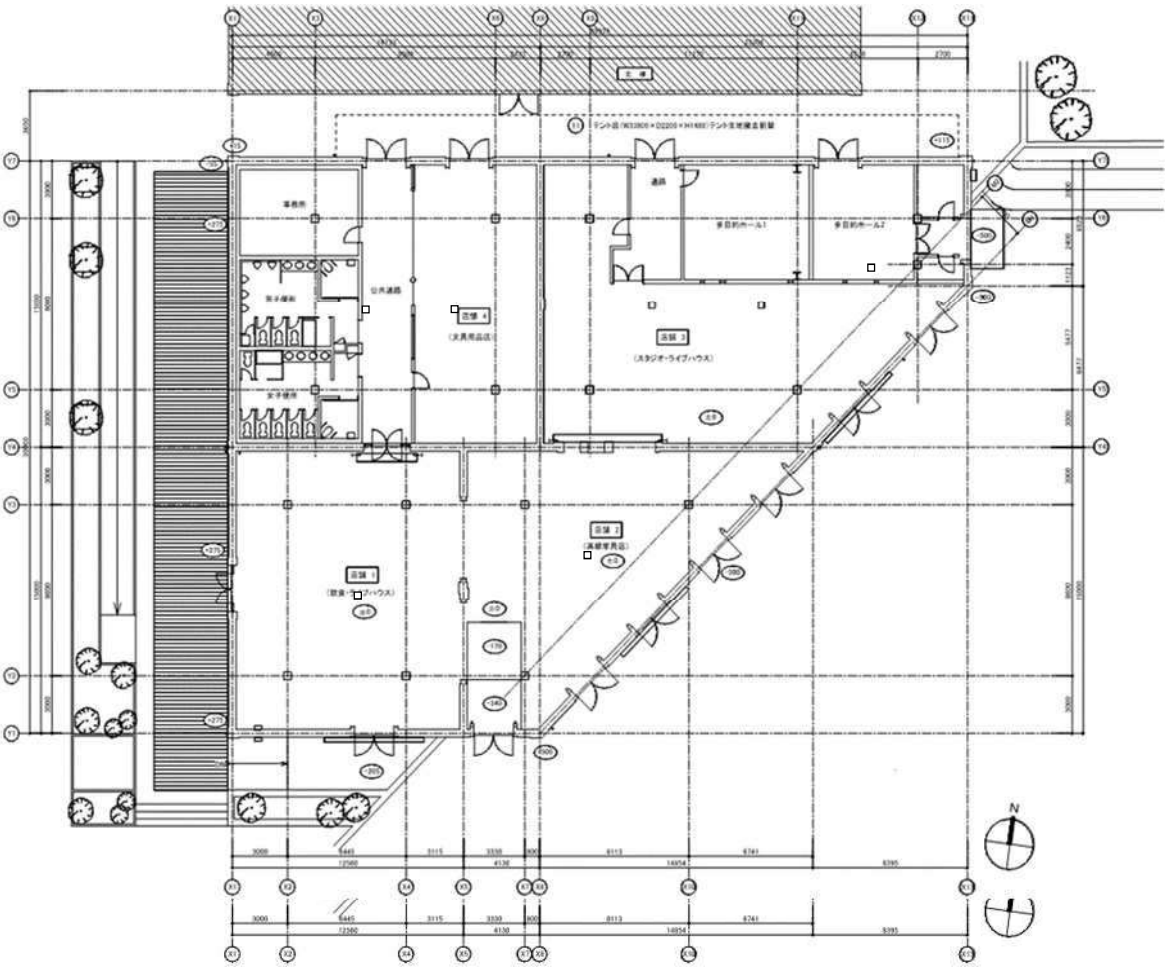
『兵庫県の近代化遺産ー兵庫県近代化遺産（建造物等）総合調査報告書ー』兵庫県教育委員会　平成 18 年（2006 年）

ハーバーランド煉瓦倉庫位置図

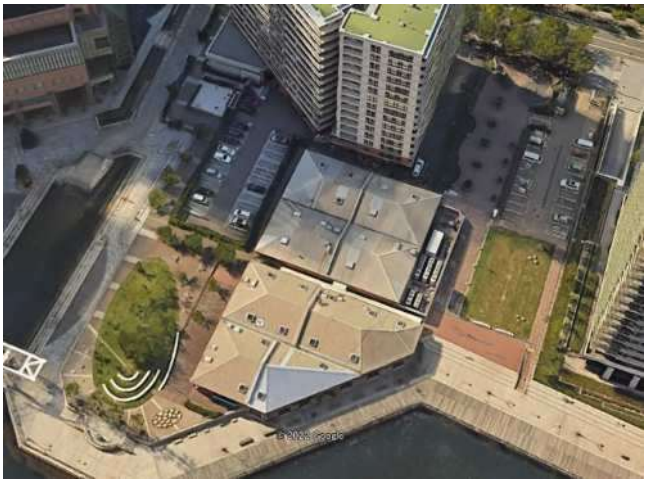
ハーバーランド煉瓦倉庫配置図（青色が登録範囲）



北棟平面図(S＝1:400)



南棟平面図(S＝1:400)

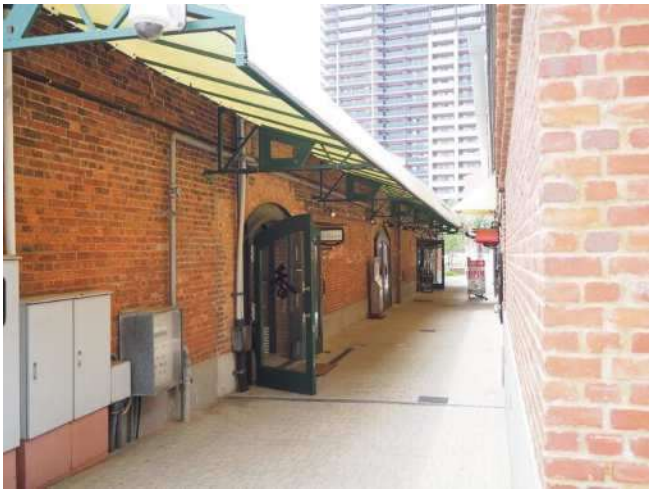


1．北棟・南棟配置状況

2．北棟と南棟（東から）

3．北棟西面（北西から）

4．北棟北面（北西から）



5．2棟間の路地（東から）

6．2棟間の路地（西から）

7. 南棟（東より）

8. 南棟東面（南から）

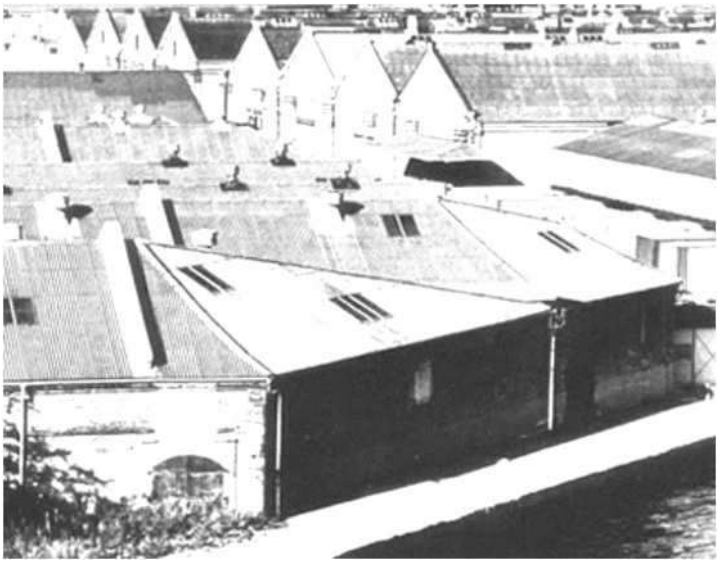
9. 南棟西～南面（南西から）

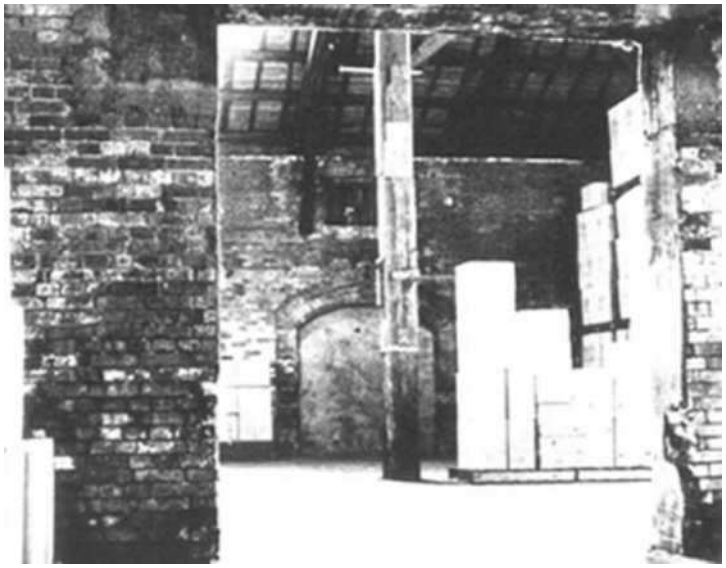
10. 南棟小屋組（部分）

（参考）

東京倉庫（三菱倉庫株式会社）高浜埠頭碑

三菱倉庫株式会社高浜倉庫跡地碑





1970 年代の
煉瓦倉庫（南棟）

神戸港第一波止場及び海軍操練所跡の遺構

所　　在　　地　　神戸市中央区新港町 16 番地
所有者・管理者　　神戸市
時　　代　　江戸時代末期～明治時代

(1)　神戸港第一波止場と海軍操練所跡

神戸港第一波止場は、明治時代の神戸開港時に整備された波止場のひとつであり、その様子は、神戸開港時の居留地を表した J.W.ハートの「神戸外国人居留地計画図」の記載や、明治時代の港を写した「瀬戸内海写真帳」（神戸市立博物館所蔵）などから、うかがうことができる。

現在、この場所は、神戸市立中央図書館所蔵の「神戸海軍操練所平面図」（制作者・制作時期不明）にもとづき、埋蔵文化財包蔵地「海軍操練所跡」として周知されている。これは、幕末期に大阪湾海防強化の重要性と海軍の必要性から、幕府が建設を進めた海軍士官養成所ならびに海軍工廠の役割を担う施設である。勝海舟の建言を受けて 1863 年（文久 3 年）に建設がはじまり、翌 1864 年（元治元年）に竣工した。ただし、幕末期の政治情勢の中、禁門の変への操練所生の関与を契機に、海軍奉行であった勝海舟が罷免されると海軍操練所も翌年の 1865 年（元治 2 年）に閉所となる。存続期間が短く、詳細な記録も伝わらないため、これまで実態は明らかではなかった。

(2) 第 1 次調査の概要

2023（令和 5）年度に、ウォーターフロント開発事業に伴い第 1 次発掘調査を実施した。遺跡は旧生田川（現フラワーロード）右岸河口部に位置し、流れ出た土砂の堆積により形成された砂嘴上に立地する。調査地は神戸港第一波止場の南東部、神戸居留地の中心通りである京町筋から伸びる京橋の南詰東側に隣接する場所である。

今回の調査では大きく 2 時期、上下 2 層の遺構面を検出した。上層遺構面では明治時代の防波堤と灯台施設を検出し、下層遺構面では幕末期の防波堤を検出した。

上層遺構面では、調査区東半の南側と北側でそれぞれ防波堤を検出し、この 2 本の防波堤に挟まれた範囲内に敷石や柵列、灯標基礎などの遺構を確認した。神戸市立博物館所蔵「瀬戸内海写真帳（明治時代中期）」には灯標を立て柵で囲まれた施設が写り、今回検出した遺構と酷似する。「神戸燈竿」と称される第一波止場入口の防波堤灯台（灯標）施設と考えられ、工務省布達には「神戸港外國人居留地東波止場ノ極端二於テ竿燈ヲ設ケ明治十年…點燈ス」（国立公文書館デジタルアーカイブ所収）とみえる。神戸燈竿は 1878 年（明治 10 年）に初点灯、1889 年（明治 21 年）頃に灯火器の交換（燃料が灯油からガスへ変更）に伴い改築、1904 年（明治 37 年）に廃灯の記録が残る（改築年については複数記載あり）。

下層遺構面では、灯台敷地を画する北防波堤の下層から大規模な石積みを検出した。わずか

に方向を違えるものの、上層遺構と同様に北東から南東に伸びる大規模な防波堤の遺構である。層位や検出位置、石積み手法などから幕末期の構築と判断可能で、海軍操練所にともなう遺構ではないかと考えられる。

なお、防波堤の石積みは、上層が谷積み、下層が布積みで、それぞれ異なる手法を用いることも特徴的である。

出土遺物には、下層防波堤前面の潮汐堆積から近世の陶磁器類や瓦があり、上層遺構では近代の遺物が認められる。特に、上層遺構に伴うイギリス製の銅板転写染付皿（ウィローパターン）やフランス製のインク瓶、オランダ製容器瓶（ケルデル瓶）などの輸入陶磁器ガラス製品が出土していることが注目される。港湾施設建設にあたり、外国人技師が関与したことを暗示する興味深い資料である。

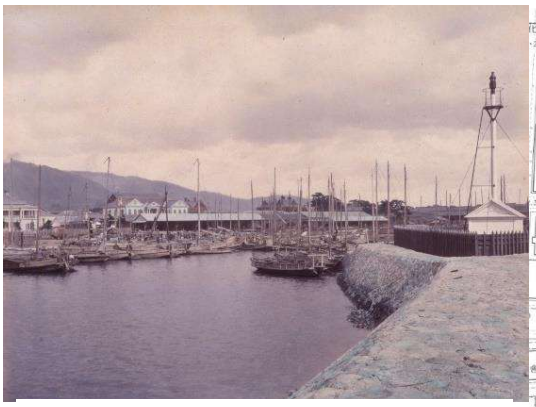
(3) 神戸港第一波止場と海軍操練所跡の遺構の保存について

今回検出した上層遺構の防波堤は、神戸港第一波止場とみられ、そこに神戸燈竿と呼ばれる灯台施設があったことがわかった。また、その下層からは、石の積み方が異なる幕末期の防波堤を検出した。層位や位置などから、海軍操練所に関連するものと考えられる。

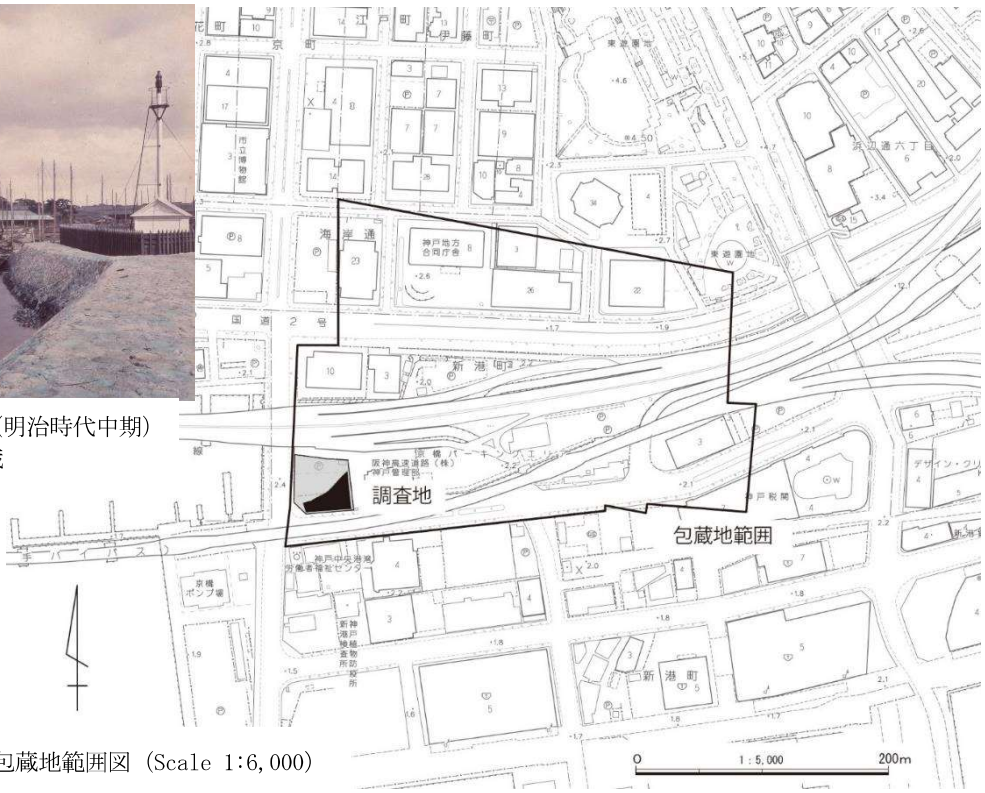
神戸港の歴史は、明治時代初頭の開港を契機として語られることが通例であったが、今回の調査で、幕末期に築かれた海軍操練所に伴うと考えられる防波堤を礎として、明治時代における港湾施設の整備、拡充が図られた過程が明らかになった。幕末期から明治時代への連続性や遺構の重層性が具体的に示されたことは、神戸港の変遷を理解する上でも新たな視点を与える成果である。

幕末期に開港した五港（神戸・函館・横浜・新潟・長崎）において、築港に伴う遺構が発掘調査により検出されたのは初めてのことであり、特筆できる。港を中心として都市形成が行われてきた神戸の原点といえるもので、重要な場所での、極めて貴重な遺構としてその学術的価値は高い。本市を代表する近代遺跡のひとつとして、適切に保存するべきである。

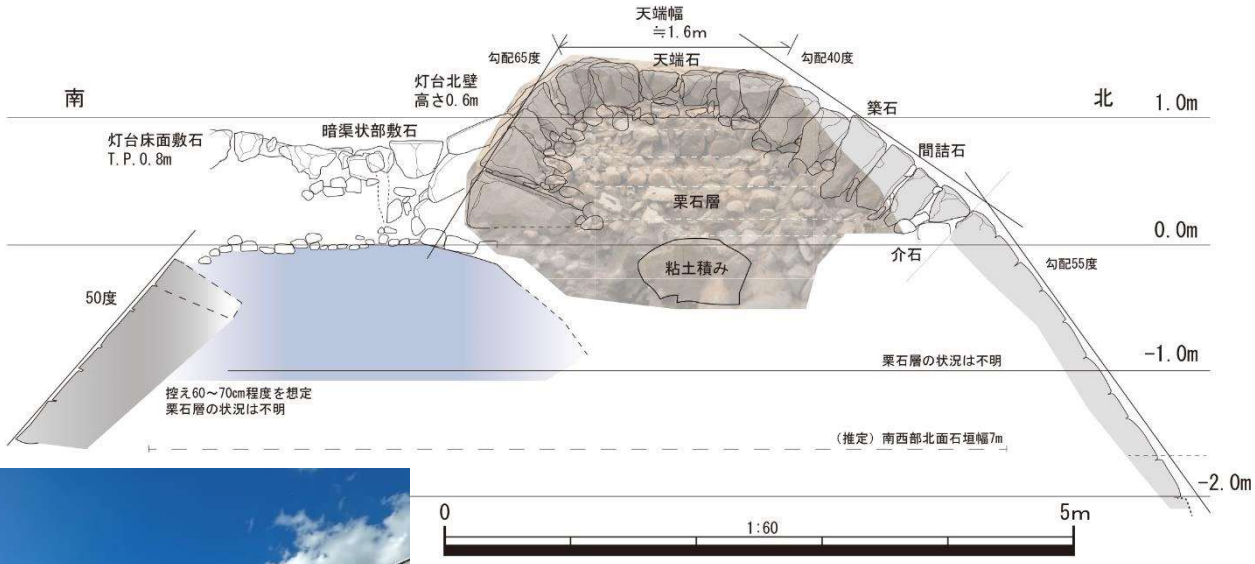
なお、調査地における土地利用計画に変化があったとのことで、現状では指定範囲を明確に定めることができない。このため今後、土地利用計画と調整のうえ、指定範囲が確定した時点で再度、史跡指定を諮問する必要がある。



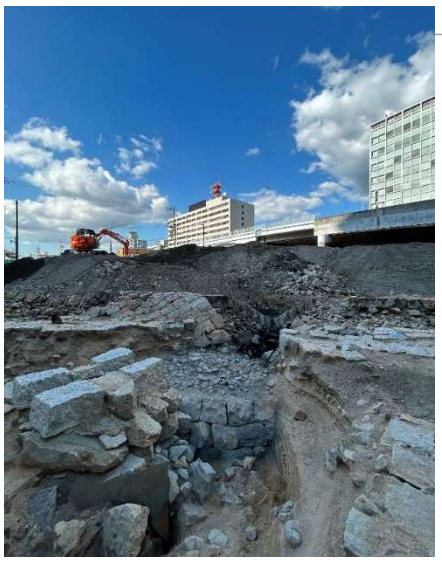
（参考）「瀬戸内海写真帳」（明治時代中期）
神戸市立博物館所蔵



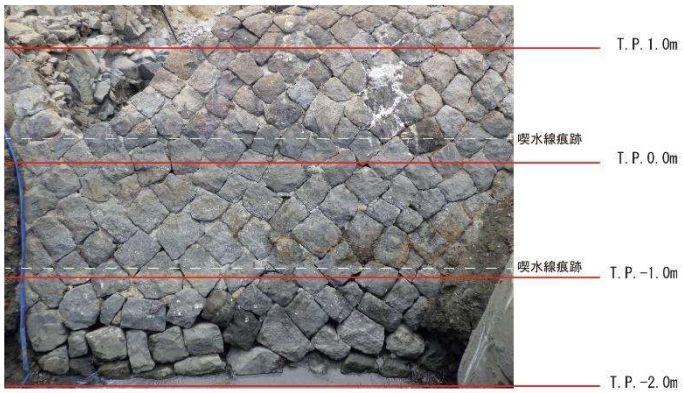
調査地位置図及び埋蔵文化財包蔵地範囲図（Scale 1:6,000）



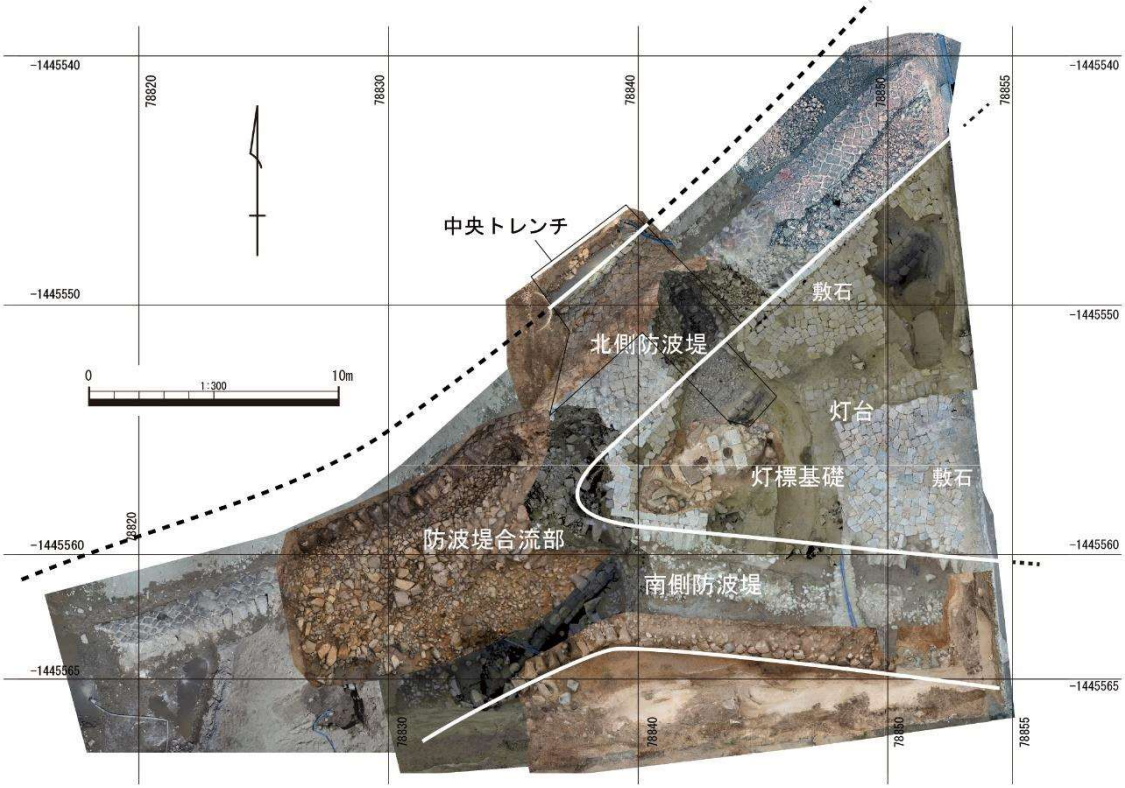
中央トレンチ断面図（Scale 1:60）



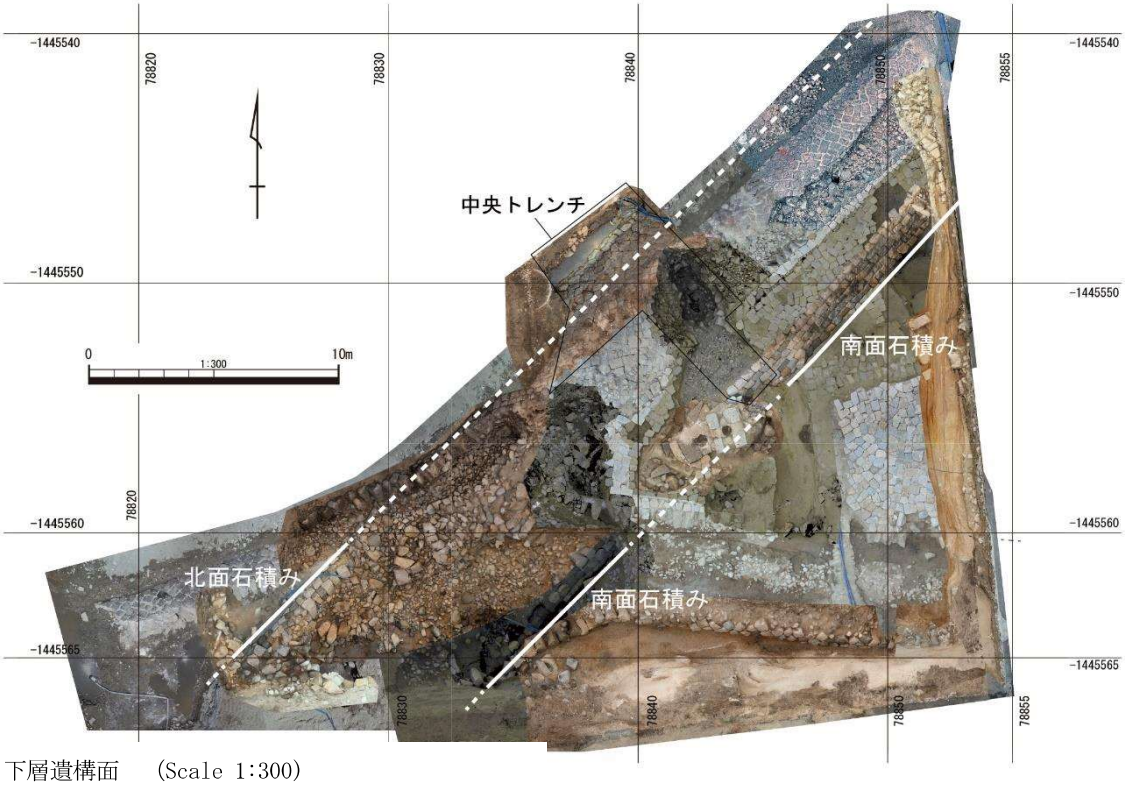
中央トレンチ（南東から）



中央トレンチ北側防波堤



上層遺構面　(Scale 1:300)



下層遺構面　(Scale 1:300)

1 発掘調査現場と神戸港方面を望む（北東から）

2 港湾施設の遺構全景　（東から）

3 上層遺構　北側防波堤（北東から）

4 上層遺構　中央トレンチ　防波堤の断面（東から）

5 上層遺構　燈竿（灯台施設）の基礎（西から）

6 上層遺構　灯台施設の敷石（東から）

7 下層遺構　防波堤南面（南から）

8 下層遺構　防波堤南面の石積構築状況（南から）

9 下層遺構　防波堤北面（北西から）

10 下層遺構　防波堤上面の栗石検出状況（東から）

11 上層遺構出土遺物

12 上層遺構出土　オランダ製容器瓶（ケルデル瓶）